

令和2年度 第2回 都市計画サロン 報告

日時：令和2年10月20日（火）

演題：「熊本豪雨被災地の現状と課題」

講師：柴田祐氏（熊本県立大学・教授）

参加者：19名

講演内容：

今回の都市計画サロンは、令和2年7月豪雨に関する被災地の現状と課題について、現地調査をもとにご報告いただき、意見交換を行った。

中山間地域における空き家対策などを研究対象として、これまでに八代市坂本町の地域づくりに関わってきた。その縁で、今回の災害に関して現地調査を行っている。7月4日の深夜から未明にかけて線状降水帯が球磨川本流域の上空に発生し、4:50に大雨特別警報が発令した。球磨川沿いにある人吉市・球磨村・芦北町・坂本町の4市町村が主な被災地である。今回報告する坂本町は、15の行政区内に74の集落があり、高齢化率の高いエリアである。急峻な地形のなかにあり、点在するわずかな平地に集落が形成されている。

本流沿い集落の被災例として、^{おしの}合志野地区や^{したがませ}下鎌瀬地区は本流沿いにある集落で、球磨川の護岸からかさ上げし堤防を築いていたが、越水して浸水した。坂本地区は、本流と支流の合流地点で支流のバックウォーターが起り、屋根まで浸水するほどの被害があった。これらの地区は本流に面する平地部分にある集落で、逃げる場所が少ないため山に逃げた人が多かった。一方、支流沿い集落では、^{くだらきがわ}百済来川沿いにある^{じんのうち}陣之内地区、球磨村の^{たぶよけ}多武徐地区、坂本町の^{みさか}三坂地区などでは、小川のような支流の上流から多量の石や礫などが流れ続け、護岸を壊して道路に溢れ、家屋を襲った。陸の孤島となった地区も多く、例えば下鎌瀬では5日間ほど陸の孤島になり、水は山からの水を溜めて飲み、停電により冷蔵庫は使えないが畑があるので食料は確保でき、ガスはプロパンガスやカセットコンロが使えたという。現在でも車が到達できない地区もあるが、住民は避難されている。

復旧復興の現状として、被災家屋では、現在までに泥だしが完了して乾燥中であり、このあと消毒して修復工事が入る予定であるが、手付かずの家屋もある。また、移動スーパーが9月から毎週水曜日に坂本地区を巡回するようになった。JR肥

薩線は運行停止となっているが、JRが代替としてタクシー輸送の運行を行っている。

被災地の災害支援として、熊本地震の時と異なる点は、非常に多くの民間団体が活動し、支援拠点としてうまく機能している点である。レストランひまわり亭（人吉）、佐敷駅（芦北町）、神照寺（球磨村神瀬）など、民間の支援拠点として開放し、住民のネットワークのなかで活動されていた。介護事業所NPOみさと（芦北町）は全国からの物資が集まり、普段からの地域ネットワークによって活動している。坂本町災害支援チームドラゴントレイルは、空家、事業所、道の駅、スーパーなどで泥だし作業を支援していた。このように、新型コロナウイルス感染症によるボランティアの活動が制限されるなかで、民間の支援拠点が自然と生まれていったことが、今回の特徴といえる。また、ボランティア活動には、地元の高校生が活躍しているのも今回の特徴のひとつである。

仮設住宅は、熊本県により808戸の応急仮設住宅が建設中であり、うち740戸は基礎のある木造仮設、68戸は移動型の仮設住宅である。これは熊本地震の反省から、早い段階で快適性が極めて高い木造仮設とすることが決まり、今後災害公営住宅に利用することや移築利用も想定されている。また、みんなの家（集会所）も整備されている。

現在、被災世帯の「次の生活への移行」に向けた調査の活動に参画しており、被災者の実態を調査している。また、各市町村で始まっている復興計画の策定に向けて、「芦北町復旧復興計画」に関わっている。歴史的にみても、球磨川は何度も氾濫しており、今回は過去の水害よりはるかに大きな水害であったが、それでも元の地域で暮らしたいという願望を持つ方も多い。「防災情報くまもと」よりハザードマップをみても、何の危険もなく居住できる地域はないといえるが、「どう逃げるか」にシフトした復興計画をたてるのが現実的かと考えている。現地では、住民も行政も復旧復興に向けて動きだしている。

意見交換：

今回の被災地の実態をお聞きし、意見交換が行われた。今後も居住し続けられるのか、復興計画は専門家だけでなく幅広く住民から意見をまとめて決定することだった。集落の土地利用や施設整備をどう考えるか、集落マスタープランのようなものを考える必要がある。

（文責：九州大学 箕浦永子）